

鳥飼重和著

『豊潤なる企業—内部統制の真実』

日本の現状を覆っている閉塞感を乗り越えるための精神的支柱となるものが何かないものだろうか、この問いを著者は真剣に追求しています。そして、その答えをサミュエル・スマイルズの『自助論』（原著は1859年発刊）に求めています。鳥飼イギリスが世界を制覇し強国になった精神的な礎でもあるこの書は、その後中村正直訳の『西国立志論』として明治初年に日本に紹介されました。「天ハ自ラ助クルモノヲ助ク」という名文句で始まる同書は、以降、近代化に乗り出した日本が急速に世界の大国として成長を果たしていく原点ともなったものだと著者は主張しています。

この『自助論』の結論、それは「人間ないし国家の成長の原理は自助の精神である」というものです。さらに、「自助の精神は、人間が真の成長を遂げるための礎である。自助の精神が多くの人々の生活に根づくなら、それは活力にあふれた強い国家を築く原動力ともなる」という指摘です。著者はこれこそが日本の現状における閉塞感打破の突破口になり得る理念だと主張しています。というのも、この精神こそが「明治日本を短期間で世界の列強のひとつにのし上げた支柱であり、イギリスを小さな島国から世界の海を制覇する大国へと成長させた真の源泉であ」ったからであるというわけです。

※

さて、著者はこの『自助論』の中の「国民」を「経営者・従業員」に、「国家」を「企業」に置き換え、社内に自助の精神がどれだけ創生されているかが企業経営の生命線であるとの主張を展開します。「自助の精神」とは、一種の危機意識にも似た自立の精神あるいは自分自身による主体的努力のことであると評者は理解しましたが、この精神や姿勢こそが、今回法律で明示された内部統制に関わる制度を企業に敷く場合の基本的かつ必須の条件であるのみなら

ず、法律をはじめとする諸制度の厳格化すらが、企業の進化あるいは成長のための契機にすら転化しうるものであると主張しています。

つまり、「自助の精神」言い換えれば、自助努力によっ

て恒久的成長をする優良な企業（豊かで潤いのある企業）にしようという主体的・自発的・自律的な精神、これがなければ、今まさに法律で要求されている内部統制制度に魂を吹き込むことは難しいということになります。こうして「法律で定まったから」というような他律的内部統制から、もっと前向きな自律的内部統制への移行」を説く著者の強い主張が導き出されます。

内部統制論議で世の中が大混乱している中にあって、本書は内部統制の何たるかを真正面からとらえ、その本質を「自助の精神」という理念に立脚して掘り下げています。ややもすれば、世の中の内部統制論議が単なる法的テクニック論や抽象的な低レベルの管理論、あるいは不祥事の事例の紹介や取締役の責任論だけに終始するような表面的かつ偏頗な書物が横行する中で、真剣に企業経営と内部統制の関わりについて追求し、「豊潤なる企業」としての条件を確認、再構成して行くことのなかに、内部統制の本質的・実践的意義を求めている本書は出色です。内部統制に関わる経営のあり方を論じる一方で、「リーガル・マインド」という観点から、この内部統制は「法律の背骨にあたる」ほどに重要であるということを経営専門家の立場から丁寧に説明しているからです。特に、証券訴訟の今後の広がりを示唆する記述や司法改革に基づく弁護士の急増が社会に与えるインパクト（訴訟社会化！）を論じる部分では、背筋が寒くなるのを覚えました。

※

まさに、内部統制に関わる多くの知見を経営と法律という側面から読者に与えてくれる本書は、会社役員、経営幹部はもちろんのこと、全てのビジネス・パーソンに一読をお薦めできる書であるといえましょう（243頁、1,575円、2007年8月発行、清文社刊）。
（新日本監査法人代表社員：中島康晴）